2007年7月30日発行

# ニュースレター News Letter No.16

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

## ご挨拶

キリスト教と文化研究所
所長
松田 和憲

この度、初代の森島牧人所長の後を受けて、2代目所長に就任致しました松田です。大変戸惑っておりますが、皆さんのご支援、ご協力を頂き、務めを果して参る所存でおりますのでよろしくお願い致します。しばらくは、前所長のリーダシップのもとに、初期の段階から研究所が大切にしてきた視点、あるいは留意してきた事柄、また今なお残る課題などを一つ一つ学びながら検証し、それを踏まえて今後の研究所の歩みを、皆さんと共に考え、語り合っていきたいと願っています。忌憚のないご意見、ご要望などがありましたならば、遠慮なくお寄せ下さい。

さて本研究所も2001年10月に発足して以来、早くも七年目を迎えました。そして2007年度のスタッフ構成は、4月1日現在、14名の所員（文学部：富岡幸一郎教授、森島牧人教授、本村浩二准教授、経済学部：安田八十五教授、古庄修教授、細谷早里准教授、工学部：武田俊哉准教授、松田和憲教授、簑弘幸准教授、法学部：影山礼子教授、村椿真理教授、人間環境学部：所澤保孝教授、帆苅猛教授、牧野ひろ子准教授)、それに学内から7名の研究員、学外から36名の客員研究員を加え、総勢57名でスタート致します。

本研究所は、創設期より３つの部門（文化研究部門：「キリスト教と日本の精神風土研究グループ」、倫理研究部門：「いのちを考える研究グループ」、実践教育研究部門：「奉仕・ボランティア教育研究グループ」）を設け研究を進めてきましたが、2004年度から「プロテスタント史研究所」の伝統を受け継ぎ、二つの研究プロジェクトを含む歴史研究部門を立ち上げました。第一は「坂田資料研究プロジェクト」（世話人：帆苅猛教授）で、本学の建学の精神「人になれ　奉仕せよ」を提唱した初代院長・坂田祐の人と思想について、特に彼の日記（坂田日記）の解読を中心に研究します。第二は「バプテスト研究プロジェクト」（世話人：村椿真理教授）で、本学院がバプテストの伝統に立って創設されたことから、バプテスト派に関する歴史神学的研究を進めていきます。さらに2005年度には、グローバル化の進む国際社会における重要課題、異なるもの相互の共生の精神の涵養をテーマとした、「国際理解とボランティア」研究プロジェクトを実践教育研究部門として発足させました。これは本学院のモットー「人になれ　奉仕せよ」の精神に基づいて「サービスラーニングの理論と実践」を研究するものです。合わせて同プロジェクトは、国際理解をテーマに、海外の各大学のもつ知的財産をインターネットによって共有する、「遠隔講義システム」に関する実験的研究をも行っております。

また、関東学院大学「キリスト教と文化研究所」の一つの果実として、研究所叢書第一号『バプテストの歴史的貢献』が出版しました。折しも2007年は、日本バプテスト同盟結成50周年「ヨベルの年」を迎えるという観点からも、この出版の意味は大きいといえます。内容は、第一章「イギリス・バプテストの日本伝道一八七九年－一八九〇年」（松岡正樹氏：日本バプテスト同盟横浜バプテスト神学校主事）、第二章「日本バプテスト派の婦人達の宣教活動に関する歴史的研究－東部組合聯合婦人会成立までの背景－」（原　真由美氏：客員研究員）、第三章「バプテスト研究への教育史的アプローチ-女性教育研究の動向と課題」（影山礼子氏：法学部教授）。第四章「教団新生会の歴史検証」（村椿真理氏：法学部教授）およびで2006年度の本研究所公開講演会「バプテストは今なお、バプテストか　－米・南部バプテストの歴史に見る バプテスト精神の変容－」金丸英子氏：客員研究員）です。

以上今までの活動、今後の方向性の一端を紹介いたしました。よろしくお願い致します。

CONTENTS

ご挨拶 ―― 1
各研究グループ・委員会の2007年度活動計画 ―― 2～4
坂田研究グループ「足尾調査」報告 ―― 5～6
2007年度新所員・研究員・客員研究員の紹介 ―― 7
本研究所の意義 ―― 8

## 2007年度「バプテスト研究」プロジェクト研究計画

所員・プロジェクトリーダー　村椿真理

2007年度からのバプテスト研究プロジェトには２つのプロジェクトが企画され既に同時進行している。第一は、前回研究プロジェクトの第二期活動で、２年間の活動期間を設定し、「バプテストの歴史的貢献、その２」なるテーマを掲げ、新たな研究員、客員研究員を学外からも迎えての取り組みとなっている。第一期研究プロジェクトは『研究叢書第１号』という形で大学出版会から３月に出版されたが、今期の取り組みは更に内容の充実をはかり、参加者に意欲的な主題選択と研究に取り組んでもらうことを義務づけるものである。プロジェクトの主題に沿った積極的な活動を展開し、適うならば再び、第２弾として叢書を出版できるように願っている。今回は学外の研究者も参加されることとなったが、当プロジェクトが初めに目指した「バプテスト研究の拠点」を我が大学に構築するとの目標に、確実に一歩近づいていることを評価していただけたなら幸いである。

研究プロジェクトの第二は、「バプテスト教科書作成準備研究」なるプロジェクトであり、学内外より４人の研究者（バプテスト歴史研究者）が集い、既に2008年度から２年間で活動する「バプテスト教科書作成プロジェクト」の基本的計画案を立て上げている。この第二の研究プロジェクトは短期１年で終了するが、活動期間内に次の「バプテスト教科書作成プロジェクト」の研究執筆ティームを事前に招集し、2008年４月のスタートに備える予定である。この前後して行なわれる２つのプロジェクトは、バプテストの歴史と神学を学ぶ信頼できる「教科書」、テキストブックを今日のバプテスト研究者の最高頭脳を結集して共同で執筆し、それを出版するという「出版事業」を目指すものである。

今日迄こうした「バプテスト通史」の学術書が日本に一切存在しなかったことから考えても、画期的な取り組みなのである。17世紀英国バプテスト史の専門家、18・19世紀英国バプテスト史の専門家、米国バプテスト史の専門家、日本のバプテスト史研究を専門とする各分野の研究者が一堂に集い、各方面において役立つ教科書を編纂出版するという計画である。これもまさしく私たちの関東学院大学が日本のバプテスト研究の一拠点となっていくために誠に意義ある試みであると思われる。2010年にその教科書を出版したいということであるが、この年は折しも「バプテスト派創設400年」という極めて歴史的な年となるのである。この記念すべき時に、是非ともこうした出版が実現できるよう、皆様のご理解とお力添えを、何としても賜りたいと願う次第である。

## 2007年度「坂田祐研究」プロジェクト研究計画

所員・プロジェクトリーダー　帆苅　猛

昨年度より計画していて、今年度にすでに実行した研究は、栃木県足尾での「坂田祐の足跡」をめぐる調査である。１２名の参加があり、多くの収穫があった。これについては別途報告したい。

従来より、我々のグループのプロジェクトとして、「坂田日記」を解読しつつ学び、デジタル資料にして保存する作業を続けてきたが、これについては今年度も継続して進めたい。

このほか、昨年度より坂田祐の東京帝大卒業論文『預言者エレミヤ』をパソコンに入力する作業を行ってきたが、これを近い将来出版することを目標に、今年度中にその準備をしていくことにしている。

さらに６月２３日(土)午後１時より、関内メディアセンターを会場に作家、新井田良子氏を招いての講演会を計画している。新井田氏は、昨年坂田の祖父、日向内記と父、中村富造を中心とする小説を上梓され、坂田についても長い間関心を持って調査・研究を続けておられる。

このほか、７月２１日(土)には三春台に「中学関東学院」が設立されたとき、神奈川県知事であり、坂田とも親交があったと思われる有吉忠一についての研究会も予定している。

# 2007年度「国際理解とボランティア研究」プロジェクト活動計画

所員・プロジェクトリーダー　森 島 牧 人

『国際理解とボランティア』プロジェクトでは、学内外の研究者の支援を頂き、昨年度は様々な研究プログラムを行うことが出来ました。昨年スタートいたしましたタイ国北部のアカ族を対象にした「タイ北部岳少数民族の自発的経済発展に寄与する農業経済的支援モデルの考察－アカ族ホイコム村の事例を中心に－」研究では、当プロジェクト研究員を現地に派遣し、事前調査や現地調査（アンケート調査と現地での実態調査）を行うことが出来ました。この結果の詳細については、所報『キリスト教と文化』第５号の成果（pp.69～79）をご参照頂きたいと思います。

私たちがこの研究プロジェクトで扱っているテーマは文化の違いという問題に根ざしています。これは国際社会全体に影響を及ぼす大変重要な問題ですが、本プロジェクトの特色は、現代の国際社会が抱えている共生の精神の涵養というこの課題に、関東学院の教育事業の特色である奉仕教育を切り口とした異なるもの同士の相互理解・相互交流の実践活動を通し取り組むという、国際サービスラーニングへの方法論的研究を進めていることです。またこのプロジェクトは、教育実践を含むものでありますので、単なる研究成果のみならず学院の学生・生徒や教職員が国内外の地域社会に貢献することで、建学の精神に基づく校訓「人になれ　奉仕せよ」の成果を実現していくことをも目的としています。グローバル化した現代の世界では、誰しもがこのテーマとかかわりを持っていると思います。その意味では、先達が苦労して築き上げた私たちの文化、社会、経済等が、マズロー（Abraham Harold Maslow）が述べる成熟した次の段階を迎えようとしているのではないでしょうか？

現在、タイの山奥の村には関東学院をはじめ海外から様々な団体や機関が訪れ、支援活動という切り口でこのテーマに取り組んでいます。技術を移入することはできるが、技術が機能する背景まで移転することはなかなか難しいというのが、今回私たちが現場で得た手応えでした。

また、昨年度の調査では着手できなかった部分も少なくはありません。例えば、支援モデルの発展段階に応じたあるべき姿や同モデルの対象市場として想定しているチェンライ市の市場調査、支援モデル導入の具体的手順、必要資金の見積等があります。そこで、本年度（２００７年度）は以下の課題を中心に取り扱う予定です。

**①支援モデルの発展段階に応じたあるべき姿を明示すること**

これについて、本研究プロジェクトのメンバー間で議論を活発に行うことは勿論でありますが、幅広い意見や知識・情報を得る必要から、学識経験者や現地で活躍されている方を講師として招き、複数回のセミナーを開催したいと思います。

**② 上述の支援モデルにおいて対象市場として想定しているチェンライ市の市場状況を把握すること**

これについては、観光客を対象に、観光目的や国籍、性別、山岳少数民族に対する意識等についての質問票を作成した後、現地の研究協力者に依頼し、アンケート調査を実施する予定です。なお、集計結果の内容によっては、追加のアンケート調査や現地での実態調査を実施することも検討しています。

## 2007年度「奉仕・ボランティア教育研究」グループ活動計画

所員・グループリーダー　影山礼子

2001年のキリスト教と文化研究所の発足以来、私たちは、奉仕・ボランティアの教育に関して、私立中・高校の先生方へのアンケート調査、教科書記述の内容分析、私立中・高校の先生方よりの実践報告をいただくことなどを通して、研究を続けてきました。引き続き、今年度は高校生と大学生にアンケート調査を行い、彼らの奉仕・ボランティア観と実態を明らかにし、その課題を探って見たいと考えています。

第1回定例研究会（4月12日）において今年度の活動方針を決め、第2回（5月10日）はアンケート調査内容について検討しました。第3回（6月14日）は回収作業と分析の視角の検討を行います。第4回（7月下旬）は回収資料の整理と分析の分担について話し合います。秋以降は高校生と大学生、それぞれのアンケート調査報告書をまとめる予定です。

## 2007年度「いのちを考える研究」グループ活動計画

所員・グループリーダー　松田和憲

昨年までは6名で、活動してきたが、2007年度から、新しく研究員・客員研究員（DwightP.Davidson氏、小髙千恵氏）が加わった。昨年までの大豆生田研究員の授業参加をして、学生たちに「いのち」の大切さを考えさせる研究活動であったが、今年度はそれに加えて、秋学期に外部から講師を招いてシンポジウムを開催し、松田の工学部後期授業『キリスト教学（倫理）』の中で「いのち」の授業にあてる予定をしている。月1で研究会活動をして、準備をしていく。

## 2007年度「資料委員会」活動計画

所員・委員会リーダー　村椿真理

2007年度、資料委員会は、地道に資料収集と発掘、また既に大学にある埋もれている貴重資料の調査と研究、整理、保管に従事する計画を立てている。新たな貴重資料を探し出し入手するという作業は、委員会メンバーが常日頃から目を光らせ、調査する努力なしにはあり得ないことなのであるが、いくら努力して探していても発見されないことの方が実際は多いものなのである。当委員会は設立当初、驚くべき貴重古書を何冊も入手して今日に至った経緯があったが、それも担当した者からすれば目を光らせていて偶然入手のチャンスにめぐりあえただけのことであった。またこうした貴重古書の入手には、ある程度の資金が必要不可欠なのであるが、研究所の現状ではそうした資金はまったくないという状況である。それにも拘らず、そうした努力を委員会は恒常的に行ないつつ、情報交換と、また学内に埋もれている資料などの調査、保管を今年度も企画し協力して行なう計画を立てている。前年度までこの委員会の責任者であられた文学部の矢嶋道文所員の力ある活動を引き継いで、今年度も委員会の使命を全うしたいと考えている。

## 2007年度「広報委員会」活動計画

所員・委員会リーダー　武田俊哉

広報委員会の活動は、ニュースレター等の刊行物を編集、出版すること、およびホームページの運営管理を行うことである。

特にホームページを通して本研究所の活動を速やかに発信していくことは、本委員会の重要な責務である。昨年度より、簑委員の監督の下、大学院生を管理者としたホームページの更新、運営体制が整えられた。この体制によりコンテンツを充実させることができた。本年度も引き続き情報の迅速な発信を行うとともに、一層のコンテンツ充実を図りたい。

ホームページに関して継続している課題として、英文ホームページの構築および充実が挙げられる。術語や用法などの問題もあり、本委員会のみの作業にて進めることは困難であるが、関連の諸先生のご助力を頂きながら、完成を目指していきたい。この課題は、国際的な活動も進めている本研究所の活動を世界へ向けて発信する重要な課題であると考えている。

## 2007年度「所報編集委員会」活動計画

所員·編集委員長　安田八十五

所報第6号発行にむけて、所報編集委員会を約8回予定している。
2005年度から活動内容などを1月から12月までとして締めているので、編集はスムースに行われ、レフリー制で編集を強化しているのでレベルは高くなっている。所報第5号では「坂田祐とバプテスト」「キリスト教と依存症」の特集としている。学術としてのレベルアップと読ませる所報を目標にしている。

## 坂田祐研究プロジェクト「足尾調査」報告

所員·プロジェクトリーダー　帆苅　猛

「坂田研究グループ」では、昨年度の所員会議で「坂田祐の足跡を訪ねる」という企画を承認していただいた。これは、坂田が生まれ育った大湯、および、勉学を志して家を飛び出し、東京の陸軍教導団に入るまでの数年間を過ごした足尾などに出かけていって、坂田の足跡をたどり、調査・研究をする計画である。

今年は、第一回目として4月28日(土)、29日(日)の両日、栃木県の足尾に出かけた。これは、この日に文学部の矢嶋ゼミで足尾に植樹に行く計画を立てていたので、「坂田祐研究プロジェクト」もこれに合流して、坂田祐の足尾での足跡をたどろうということになったのである。

「坂田祐研究プロジェクト」では、研究員を中心に6名が28日の朝早くに横浜を出て足尾に向かい、研究調査をする予定であったが、いろいろな事情で、結局、牛坊夫妻と帆苅が車で足尾に行き、松岡正樹氏が電車で足尾に向かい現地で合流することになった。

車のほうは、幸い天候にも恵まれ、道路も心配した混雑もなく、スムーズに足尾に到着した。松岡氏と足尾駅で合流するにはまだ時間があったので、坂田家の墓がある龍蔵寺の場所を確認だけして足尾駅に向かった。

足尾駅ではちょうど、「足尾祭」という足尾をあげてのイベントが開催されており、楽隊が演奏し、特産品の販売がなされていた。販売品の中に足尾銅山などの歴史を記した書物も置かれていたので、参考になりそうなものを数冊購入した。

松岡氏が到着してから、まず、下調べをしておいた龍蔵寺を訪ねた。庫裏にご住職を訪ねて墓の場所を尋ねたが、坂田の墓の場所はご存知ないとのことであった（後に判明したことでは、数年前に亡くなられた前住職が足尾の歴史を研究しておられる方だったことであった)。
ようやくのこと坂田家の墓を探し当てたが、突然、雨が降り出し、激しい雷雨となり、大粒の霙に変わった。落雷の危険を感じ、車の中でしばらく待機したが、雨が続くのでこのあと調査を予定していた松原に向かった。ここは、坂田の義父、つまり、坂田祐の最初の妻チエの父、坂田桃吉の家があったところであり、坂田も結婚してしばらくここに住んでいた。

この松原は足尾駅を少し下ったところにあり、現在は番地がついているが、坂田の葉書等では「松原」としか記されておらず、場所を確定するのが困難かと思われた。旧道を行きながら、学校に併設されている図書館で資料を調べることにした。学校の場所を尋ねあぐねて近所の方に場所を聞こうと思い、車をとめて、観光案内所のような家に向かった。するとその家の壁に明治時代の足尾の街道沿いの店や事業所を記した看板が掲げてあった。そこには坂田桃吉の大工事務所があり、道路を挟んだ斜め向かいには「坂田住宅」との表示があった。

家の中にいた方に坂田の事務所があったところがどこかわからないか訪ねたところ、たまたまその方も足尾の歴史を調べていた方(本業はラーメン屋のご主人)であり、その場

所を案内して教えてくださった。そこは現在は、消防設備の保管庫のようになっていた。

このあと、さらに南に下って、庚申山方面に右に曲がり、坂田が独身時代に一時働いていた小滝（小滝の電気係であった）に向かい、小滝坑跡をはじめとして何箇所かを写真に収めた。雨も上がっていたので、この後再度、龍蔵寺の坂田家の墓に向かった。

坂田家の墓地には大小2つの墓石が並んで建てられていた。大きいほうの墓石には、坂田桃吉（明治43年8月11日　48歳）のほかに、桃吉の父と思われる坂田長造（明治43年３月２日　８１歳）、母と思われる坂田やす（大正６年１月１９日　６６歳）、妻と思われる坂田きよ（大正３年１２月１６日　４２歳）の名が刻まれ、桃吉の長男の坂田一郎が建てたことが記されていた。もう一方の小さい墓石には坂田ヱ？と記されていた。皆で額を寄せ合って検討したが、最後の文字は損傷していて解読不可能であった。この名前のほかに、「明治２４年５月１６日没」という命日と、住所「上都賀郡鹿沼町字天神町」が記されていた。墓石を写真に取り、ささやかな供え物をささげて、今夜の宿である銀山平のかじか荘に向かった。

銀山平で矢嶋ゼミの学生たち６名および矢嶋先生と合流した。このほかに、関東学院大学OBで、燦葉会栃木県支部の役員、本田梧郎氏も加わってくださった。

翌日、NPO法人「足尾に緑を育てる会」の植樹に参加したあと、足尾出身で足尾の観光や緑化の事業にかかわっておられる小野崎敏氏に案内していただきながら、足尾の歴史や現状について学んだ。

小野崎氏は祖父が足尾の全盛時代に写真館を経営しておられ、それらの写真をまとめて写真集を出版され、足尾の歴史についても熟知しておられた。氏は坂田についても調べておられ、雑誌などにも坂田について書いておられた。このほか、坂田が足尾に一時滞在していたことを記念する坂田と関東学院の看板も掲示して下さっていた。

小野崎氏によると、坂田桃吉の飯場は最初、深沢（足尾よりかなり北の方向になる）にあった、坂田祐はそこから川向かいの本山小学校の夜学に通って学んでいたのだ、深沢が洪水に見舞われてから松原に移ったのだ、という。

ただ、このことについての資料は我々の手元にはない。小野崎氏に坂田が本山小学校の夜学に通っていたということの資料は何かないか、と尋ねてみたが、そのように伝え聞いているとのことであった。

上記の件についての事実確認が今後の課題として残った。ただ、現地に訪れて確かめられたことも数多くあり、その点では収穫の多い調査旅行であった。

# 新所員の広場

## 新しく加えていただきました。

経済学部　細谷 早里

1998年に経済学部の教員となって以来、早いものでもう10年目となりました。回り道をしましたが、キリスト教を旨とする学院で仕事ができることを幸せに思っております。そしてさらに、本年度より本研究所の所員として加えていただきました。

20代でタイのカンボジア難民キャンプ、30代でバングラデシュでのボランティアを経験する機会があり、発展途上国と先進国の関係に、若いなりに問題意識を持つきっかけとなりました。また、アジア、アメリカ、ヨーロッパでの異文化経験により物事を複眼的に見る必要性を痛感しました。

現在、異文化間コミュニケーションと異文化間教育を研究しています。異文化間コミュニケーションの授業を担当していますが、この授業では私たちの気づかないうちに、いかに自分の考えや行動がパターン化してしまっているかということをまず学生に気づいてもらいたいと思っています。

研究者となった現在、以前とは違った視点で、今まで関心を持ってきたボランティアやその延長線上にある国際貢献について皆様にいろいろとおしえていただきながら研究することができればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

## キリスト教とアメリカ研究

文学部　英語英米文学科　本村 浩二

現在3、4年のゼミナールにおいて、「宗教」をひとつのキィワードにして、アメリカの歴史的文献や小説を読み解き、アメリカのアイデンティティを探ることを目指しています。「宗教」といっても、周知のように、アメリカ人の80%以上がキリスト教徒であり、彼/彼女らの半数以上がプロテスタントであるため、当然プロテスタントの国としてのアメリカ理解が重要になってきます。しかし、私も学生もキリスト教やプロテスタント的価値観に関して造詣が深いわけではありません。だから、たとえばプロテスタントとカトリック教徒の違いというような大きなトピックについては、どうにかこうにか議論が成立しても、プロテスタントの宗派間の違いというようなディテールにうっかり踏み込んでしまうと、まったくのお手上げ状態になってしまいます。お恥ずかしいことに、私には"Baptist"と"Methodist"がどう違うのか、あるいは"Presbyterian"と"Episcopalian"がどう違うのか、うまく説明することができません（洗礼の仕方の違いぐらいは知っていますが）。本学の信仰深い教職員の誰かから「それではダメです。もっと勉強しなさい」と叱咤されそうですが、そのときは素直に「はい、そうします」と答えるつもりです。

おのれの不勉強さと無知さを曝け出すような自己紹介文になってしまいましたが、研究所のグループに加えていただいた以上、しっかりと勉強するつもりです。どうかよろしくお願いいたします。

## 2007年度 所員・研究員・客員研究員の紹介

### 所員

所長

| | |
|---|---|
| 松田　和憲（工学部教授） | 「いのちを考える」研究グループ |

所員

| | |
|---|---|
| 森島　牧人（文学部教授） | 「国際理解とボランティア」研究プロジェクト |
| 帆苅　猛（人間環境学部教授） | 「坂田祐」研究プロジェクト |
| 所澤　保孝（人間環境学部教授） | 「奉仕・ボランティア教育」研究グループ |
| 影山　礼子（法学部教授） | 「奉仕・ボランティア教育」研究グループ<br>「バプテスト」研究プロジェクト |
| 村椿　真理（法学部教授） | 「バプテスト」研究プロジェクト<br>資料委員会 |
| 安田八十五（経済学部教授） | 「依存症とキリスト教」研究プロジェクト<br>「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ<br>所報編集委員会 |
| 富岡幸一郎（文学部教授） | 「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ |
| 古庄　修（経済学部教授） | 所報編集委員会 |
| 細谷　早里（経済学部准教授） | 「奉仕・ボランティア教育」研究グループ<br>所報編集グループ |
| 簑　弘幸（工学部准教授） | 広報委員会（HP担当） |
| 武田　俊哉（工学部准教授） | 広報委員会<br>「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ |
| 牧野ひろ子（人間環境学部准教授） | 「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ |
| 本村　浩二（文学部准教授） | 「バプテスト研究」プロジェクト |

### 研究員

| | |
|---|---|
| 椙木　紀男（工学部特約教授） | 「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ<br>「依存症とキリスト教」研究プロジェクト |
| 高野　進（経済学部特約教授） | 「奉仕・ボランティア教育」研究グループ |
| 矢嶋　道文（文学部教授） | 「坂田祐」研究プロジェクト |
| 小林　照夫（文学部特約教授） | 「国際理解とボランティア」研究プロジェクト |
| Dwight P. Davidson（文学部特約教授） | 「いのちを考える」研究グループ<br>「国際理解とボランティア」研究プロジェクト |
| 佐藤　光重（法学部准教授） | 「バプテスト」研究プロジェクト |
| 大豆生田啓友（人間環境学部准教授） | 「いのちを考える」研究グループ |

### 客員研究員

「バプテスト」研究プロジェクト　松岡　正樹（日本バプテスト神学校教務主任）　大島　良雄（元文学部教授）　川島　第二郎（日本バプテスト横浜教会員）
佐々木　敏郎（彰栄保育福祉専門学校学園長）　原　真由美（日本バプテスト同盟機関紙編集委員）　金丸　英子（西南女学院大学准教授）　枝光　泉（日本バプテスト連盟　北山バプテスト教会牧師）
伊藤　哲（本学非常勤講師）　古谷　圭一（恵泉女学園大学名誉教授）
「坂田祐」研究プロジェクト　小川　圭治（元学院長）　花島　光男（キリスト教学校同盟勤務）　坂田　創（元関東学院中・高等学校教諭）　佐々木　晃（元関東学院中・高等学校教諭）
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト　勘田　義治（本学非常勤講師）　島田　正敏（関東学院六浦小学校長）　山本　直美（専修大学非常勤講師）
加藤　壽宏（中央学院大学非常勤講師）　菊地　昌弥（東京農業大学国際食料情報学部副手）　森島　豊（日本基督教団　長崎平和教会牧師）　吉川　成美（株式会社　永田農業研究所）
大西　純（弘前大学国際交流センター副所長・教授）　佐々木　和之（ルワンダ・リーチNGO現地職員）
「依存症とキリスト教」研究プロジェクト　田代　泰成（横浜女学院中・高等学校教諭）　三井　純人（カウンセラー）　小林　弥生（本学非常勤講師・カウンセラー）
「いのちを考える」研究グループ　長井　英子（本学非常勤講師）　吹抜　悠子（キリスト教メンタル・ケアーセンター員）　石谷　美智子（キリスト友会・東京月会所属）
安達　昇（横浜市立青葉台小学校教諭）　三浦　一郎（本学非常勤講師）　小高　千恵（関東学院野庭幼稚園教諭）
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ　花島　光男（キリスト教学校同盟勤務）　小川　圭治（元学院長）　大島　良雄（元本学教授）　中島　昭子（捜真女学院中学校教頭）
藤原　久仁子（法政大学非常勤講師）　田中　喜芳（本学非常勤講師）　田代　泰成（横浜女学院中・高等学校教諭）　三井　純人（カウンセラー）　山本　直美（専修大学非常勤講師）
加藤　壽宏（中央学院大学非常勤講師）　安井　聖（日本ホーリネス教団西落合キリスト教会牧師）　伊藤　哲（本学非常勤講師）
「奉仕・ボランティア教育」研究グループ　村上　顕（元経済学部教授）
「資料委員会」　松岡　正樹（日本バプテスト神学校教務主任）　佐々木　敏郎（彰栄保育福祉専門学校学園長）　中島　昭子（捜真女学院中学校教頭）　川島　第二郎（日本バプテスト横浜教会員）

# 本研究所の意義

学院長
森島　牧人

関東学院の源流は、1884年に横浜山手に創設された「横浜バプテスト神学校」です。その後、総合学院として発展を遂げますが、1973年、関東学院大学は、学園紛争を通し本学院教育の原点であり要である神学部を失いました。その結果、建学の精神に基づく教育の理念とその実践方法構築の部署を持たずに歩むことを余儀なくされてきました。そのことから考えると、2001年7月に大学内に設置された「キリスト教と文化研究所」の意義とその使命（ミッション）は大きいと考えます。本研究所の目的は、キリスト教学校として創設された関東学院の真の教育ミッション達成に資する事にあります。関東学院大学らしい研究所の在り方が、いまさらに求められていると感じます。この観点からこの場を借り、本研究所の働きに関し若干まとめておこうと思います。

本研究所の第一のテーマは、「歴史の検証　伝統の継承」です。第二は、当研究所の名称が示している如く、<と>の原理の展開であります。それは、建学の精神であるキリスト教と大学の諸科学との対話を目的としていると言えましょう。敢えて、キリスト教文化研究所と銘打たなかった所以であります。

この設置趣旨の下、当研究所は創設時より、キリスト教と大学の諸科学との対話を目的とした3つの部門（文化研究部門、倫理研究部門、実践教育研究部門）を設け、研究を進めてきました。この中には「キリスト教と日本の精神風土」、「いのちを考える」、「奉仕教育における課題と実践」等の研究グループが生み出されてきました。さらに2004年度には、本研究所の前身が「プロテスタント史研究所」であることから、その伝統を受け、新たに歴史研究部門が創設され、研究の全体を4部門構成とし今日に及んでいます。この歴史研究部門の中には、以下の二つの研究プロジェクトが立ち上りました。一つは、「坂田（資料）研究」で、本学の建学の精神「人になれ　奉仕せよ」の制定者である坂田祐の人と思想を、特にその残された日記（坂田日記）の解読を中心に研究しています。二つめは、「バプテスト研究」です。本学院教育の基盤であるキリスト教はバプテスト派の伝統をもっていますが、本プロジェクトはバプテスト派に関する歴史神学的研究を進めています。これら二つは、共に学院のアイデンティティーを求めるための研究であります。また2005年度には、実践教育研究部門の中に「国際理解とボランティア」研究プロジェクトが発足しました。ここでは、学院のモットーである「人になれ　奉仕せよ」の精神を、国際的視野に立ち実践することを目差して、奉仕教育の方法論的研究（国際サービス・ラーニング）に取り組んでいます。今日、グローバル化が進むこの国際社会の中で、国と国、民族と民族、文化と文化、社会と社会、そしてそこに生きる一人一人の人間が、共生の精神を実現するためには、国際間の相互理解が最重要課題となるからであります。そのためには、ボランティアの精神を軸にした国際サービスラーニングの理論と実践研究は欠かせないものと考えております。これも関東学院らしい教育を模索する試みです。さらにこのプロジェクトは、インターネットを用いて各大学が持つ知的財産を共有し合うためのシステム作りに、産学体制で取り組んでいます。タイと日本間での実験は、2005年12月22日無事終え、今後は、英国オックスフォード大学、タイ国チェンマイ大学、中国南京師範大学及び韓国東西大学との遠隔講義を実験的に運用する計画です。その目差すところは、同じく共生の精神の涵養であります。

さて2007年、関東学院大学「キリスト教と文化研究所」の一つの果実として、本研究所叢書第一号『バプテストの歴史的貢献』が出版されました。折しも2007年は、日本バプテスト同盟結成50周年にあたります。「ヨベルの年」を迎えるというその観点からも、この出版の意味は大きいと言えます。

最後になりましたが、皆様方のご健康をお祈りするとともに、今後とも当研究所へのご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501
神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号
TEL：045-786-7873（研究所直通）

発行者：松田　和憲
Director：Kazunori Matsuda

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY